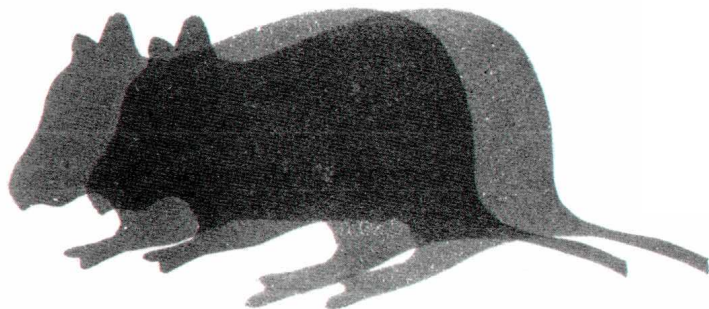
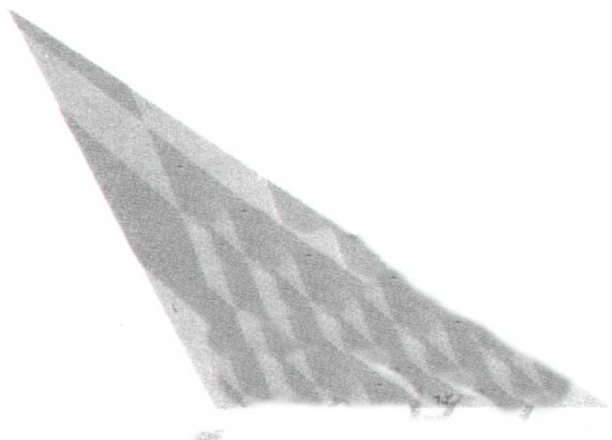


海の鼠 吉村 昭



海の鼠

吉村 昭



新潮社版



海の鼠 うみのねずみ

定価 六五〇円

昭和四十八年五月十日 印刷
昭和四十八年五月二十日 発行

著者 吉村昭 よしむらあきら

発行者 佐藤亮一

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社

電話東京二六〇一一一一
一六二 振替東京八〇八

(乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。)

短編集『海の鼠』目次

海
の
鼠

7

蝸
牛

125

鵜

.....

161

魚影の群れ

.....

205

裝幀二見彰一

海 の 鼠

海
の
鼠^{ねずみ}

一

海沿いに低い軒をつらねる家並の中から、ささやかな葬列が湧いた。

白木の坐棺が天秤棒でかつがれ、その上に竜の彫物のきざまれた大きな天蓋がかざされている。碗に盛られた飯や、香炉、香箱、菓子などが人々の手にした高坏にのせられ、坐棺にしたがつて進んでゆく。

島は、まばゆい夏の陽光につつまれていた。

風いだ海は明るい色をたたえ、島をおおう緑は濃く、深くくびれた小さな湾にのしかかるように迫る傾斜地には、段々島が美しい縞紋様をえがいていた。

島は四国の西南方に位置し、近くには多数の島々が点在している。陸地部との交通は、わずかに一日一度島々を縫うようにやってくる定期船のみで、海が荒れると数日間も便は絶えた。

村には船着き場がもうけられ、海岸の正面には島を支配していた旧庄屋のいかめしい建物が長と横たわっている。平安時代の初期に朝廷に叛旗をひるがえした一豪族が九州、瀬戸内海、山陽方面を襲う海の根拠地として使用したというが、島々の点在する海は身をひそませるのに恰好な地であつたのだらう。

旧庄屋の建物に沿つて進んだ葬列は、朽ちかけた上納藏の傍から鋭く傾斜した道にかかった。人々の歩みは急ににぶくなって、男たちは袴をたくし上げ、女たちも喪服の裾をつかんで背をまゐめて細い道をあがつてゆく。

墓地は、斜面の中腹にあつた。大小さまざまな墓石は一様に海にむかつて並んでいて、葬列は、その一郭にたどりつくると坐棺を土の上におろした。

墓石は潮風にさらされて粉をふいたように風化したものが多かったが、墓地には、所々に木肌の新しい卒塔婆が突き立てられていた。その数は異様なほど多く香華も供えられていて、村に多数の死者が一時に出たことをしめしていた。

土に鍬やスコップが突き立てられ、坐棺がうがたれた穴におろされた。鉦をたたく僧の読経の流れる中で土塊が棺の上に落され、やがて盛り上った土の傍に数本の卒塔婆が立てられた。

土葬を終えた人々は、うつろな表情で墓地に林立する卒塔婆の群れをながめた。村人たちにとって、それほど多くの死者を葬ったことは初めての経験であつた。

不慮の事故は、一カ月ほど前に起つた。

平坦地に乏しく耕作に多くの收穫を望めぬ島の住民は、生活の糧を海にも求めていた。付近の海は豊かな魚介類に恵まれ、鰯、鰺、鯛、サワラ、ブリ等の魚が群れ、アワビ、サザエ、ヒジキ、

水草などが島々をつつむ岩礁に棲息していた。

殊に鯛は、古くから付近一帯の海を絶好の回游地としていて、島の生活をうるおしていた。

終戦の日から四年が経過していたが、依然として食糧不足は深刻だった。

島の耕作物といえば段々畠でとれる麦と甘藷程度で、住民はイモ入りの麦飯を主食としていたが、それだけでは間に合わず陸地部から穀物を運びこまねばならなかった。

しかし、陸地部の農村も肥料不足で収穫も乏しく、島の住民に食糧を供給できる余裕はなかった。島の者たちが穀物入手できる唯一の方法は、海で得られる魚介類と交換に陸地部の農村から食糧を入手することのみであった。

住民たちは、飢えからのがれるために海へ舟を出した。幸い大漁がつづいていて、島の者たちは海のアたえてくれる恩恵で平穏な日々を送っていた。

六月に入ると、宇和海の南方に長く突き出た佐多岬半島付近一帯に例年通り鰺の群れはじめたという情報が入った。島々の漁師たちは、網元を中心に漁船を組んで出漁した。

漁の方法は、三隻の船が火をたいて魚を集め、双手巾着網と称する網を海面に張る。網船は二隻で、鰺を揚げると運搬船が魚市場にはこび、他に一隻の曳船も加わって計七隻が一团を組んで行動する。島では五船団が佐多岬半島にむかい、近くの日振島でも七船団が出漁した。

季節的に海はおだやかで、漁場に集まった漁船の放つ篝火が一面に海上をいろどり、その中で鰺の群れが網の中でひしめき合いながら引き揚げられていた。

漁師たちを最もおそれさせていたのは、台風に遭遇することであった。

南方洋上で発生した台風は北上すると、必ずと言っていいほど島の近くを通過してゆく。その

勢いはすさまじく、島々の住民たちは、家を吹きとばされることを恐れて瓦を漆喰でぬりかため石塊をのせ、軒をカスガイで固着して防備につとめていた。また漁船の群れは、貧弱な設備しかもたぬ島の港をはなれて、遠く陸地部の港の奥深く避難するのを常としていた。

しかし、例年六月は無風の日がつづき、台風の襲来も皆無であった。漁師たちは、なんの不安もなく風いだ海上で鰯をとることに専念していた。

六月十三日、カロリン群島に台風が発生し北西にむかって進みはじめた。そして、十九日には沖縄の南方四百キロの海上に達したが、漁師たちは、その気象情報にも全く危機はいだいていなかった。かれらは、長い海上経験から六月に台風が襲来するなどは考えもしなかったし、島にも、「六月にはヨモギの葉もそよがぬ」という言い伝えすら残されていて、台風が他の方向にそれるにちがいないと信じこんでいた。

しかし、台風は、進路を急に北々東に転ずると同時に、毎時六十キロメートルという異常な速度で進みはじめた。そして、二十日夜半には九州南端に上陸し、その日のうちに早くも九州を縦断して玄界灘から日本海にぬけてしまった。

その高速台風海上には激浪が逆巻き、愛媛県下のみでも一、六五五隻の漁船が遭難し、八四九隻が沈没、八〇六隻が破壊されて、死者二三四名、重軽傷者二二九名という四国地方でも類のない大被害をうけた。

佐多岬半島の三崎沖合で漁をしていた漁船群も、台風の猛威の中に巻きこまれた。

二十日午後六時、漁をはじめた漁船は、急に荒れはじめた海上で互いにロープを結び合い激浪とたたかっていたが、二十一日午前一時ごろロープが切断されて漁船は四散し、各漁船は怒濤に

もてあそばれながら次々に転覆していった。

島から出漁した漁船にも沈没事故が続出し、三十八名の漁師が行方不明になった。そして、台風が通過後、佐多岬半島一帯に遺体収容作業がおこなわれたが、まず島出身の行方不明者中十遺体が発見されて島に送り返されてきた。腐敗どめの氷にうもれた遺体は、各家々で坐棺におさめられると、その日のうちに墓地へはこばれ土葬された。

村には天蓋が二本しかなかったので、埋葬が終ると天蓋はすぐに村に引き返し、新たに組まれた葬列とともに斜面をのぼっていった。

その後、遺体の発見はつづいて、墓地に卒塔婆の数は増していった。

海に船を出す者もなく段々島に人影も絶えて、村全体が喪に服す日がつづいた。人々は、葬列に加わることで日を過し、かれらの喪服も薄汚れていった。

遺体の数は徐々にへって、葬儀のおこなわれることも稀まれになった。そして、その日墓地へむかった葬列が、台風による遭難事故の最後のものではあった。

その日土葬された若い漁師の遺体は、波にもまれながら岩礁に何度も激突したらしく、右腕はちぎれ顔も白骨が露出するほどそこなわれていて、その識別は困難だった。が、奥歯にはめられた金冠と左手の薬指が失われていた特徴から、遺体が島の漁師であると確認された。

遺体は腐爛くらんしていたので収容地で焼骨され、島へ送られてきた。が、死者を土葬にする習慣をもつ島の者たちは、形通り骨壺を坐棺におさめると墓地へ運び上げたのだ。

墓地に立ち並ぶ新しい卒塔婆をながめる村人たちの顔には、悲嘆に堪えた表情と三十八体の死者の葬儀がすべて終った安堵の色が入りまじって浮んでいた。

死者は、村の得がたい働き手ばかりで、遺族のみならず村の生活にとっても大きな痛手であった。喪服を着た者たちの眼には、生活に対する不安の色が濃くにじみ出ていた。が、かれらには一種の慰めにも似た感情も湧いていた。三十八名の漁師が一時に死者となったことは島全体の悲しみであったが、その被害は、四キロ西方にうかぶ日振島にくらべればむしろ最小限度に食い止められたと言っている。

日振島では、五十三隻の漁船、曳船が佐多岬半島方面に出漁し、台風に遭遇して三百二十八名中百六名という多量の死者を出している。漁船の大半は沈没又は破壊されて、遺体のうち未発見のものも数多いという。

日振島では、連日のように葬儀がつづけられ、未発見の肉親の遺体をもとめて多くの遺族たちが佐多岬半島で日を過している。そうしたことを耳にしていた島の者たちは、葬儀がおこなわれる度に悲嘆にくれながらも日振島の悲運を口にし、それを一つの心の支えとしていたのだ。

天蓋がたたまれ、葬列に参加していた者たちは、思い思いに墓地をはなれると細くうねった路を下りはじめた。かれらは時折足をとめ、襟えりをはだけて汗に濡れた胸元に風を入れた。

海は明るく輝き、点々とつらなる島の後方に四国の山なみが望まれる。かれらは、口をつぐんで眼になじんだ風光をみつめていた。